いつの時代も真実と夢みる力を語り出す人

北村愛子第九詩集『今日という日』に寄せて

1

北村愛子さんの詩行の底からは、率直な心の在りようが湧き出てくる。その純粋さは、優れた詩人に宿っている特性であり、それは天性の詩人だけが兼ね備えているものだろう。北村さんは、自らの心に映し出された他者の存在理由や事物の真実、そして生きるために必要な夢みる力を語らずにいられない。現実の困難な「今日」の情況を乗り越えようと、泥の中に咲く蓮の花のように生きてきた詩人だと感じさせてくれる。私は北村さんの詩を読むと、なぜか詩を生み出す精神から真実を語ろうとする切実な声に引き込まれ、素直に耳を傾けてしまうのだ。このように内面の声に素直に生きることは、実は多くの人びとにとって理想だろう。北村さんは人知れぬ努力もあったろうが、十代半ば過ぎにはすでにそのような存在であったことが初期の詩を読めば分かる。それは北村さんが自分のためではなく、「今日」を誠実に生きている家族や仲間や他者のために詩を書こうとするタイプの詩人であったからだと思われる。一九六三年に二十六、七歳の時に刊行した第一詩集『祖国の砂漠の中に』の冒頭の詩「田舎」を引用してみる。

田　舎

畑道を男の子が駆けて行く
（おおうい）
だれかが呼んだ
晴れた空
小さな妹が赤い椿を持って
にっこり笑っている
（一九五一年）

この「田舎」を書いたのは、北村さんが一九三六年生まれだから一五歳頃だった。第四詩集『証言　――横浜大空襲――』には、三十万人が被災し一万人近くが亡くなったと言われる一九四五年五月二十九日前後の出来事が、九歳の北村さんのリアルな眼差しによって記録されている。北村さんの父は徴兵され兵役につき終戦後に帰還したが、肺結核で手術をしたけれども手遅れで亡くなったという。父のいない母子の家庭は一九四五年五月横浜大空襲に遭遇した。ただ母は関東大震災の経験者であり地震で兄を亡くしていて、その時の経験から熱風によって川に逃げた人びとは助からなかったことを知っていた。北村さんは警防のおじさんや母の言葉に従ったためにたまたま助かったという。翌日よく晴れた大岡川には、無数の死者が浮んでいた。また同級生のゆみちゃんや弟の勇くんは防空壕を焼夷弾が直撃して死んでしまった。ゆみちゃんの母親が二人を焼いた場面を悲劇の証言として詩「亡骸（なきがら）を焼く」に書き記している。二〇〇九年の三月十日に発行した『大空襲三一〇人集』の編集過程で、東京大空襲の詩篇は五十篇以上集まっていたが、横浜大空襲の詩篇が数少ないことに気づいた。余談になるが私が敬愛していた鳴海英吉は、婚約者で十八歳だったふさ子を横浜大空襲で亡くした。『鳴海英吉全詩集』を編集する際に、他の編集委員と相談し「ふさ子を鎮魂した詩」五篇を冒頭に置いた構成にした。シベリヤ抑留者だった鳴海英吉はふさ子の詩篇をよく朗読したが、いつも言葉に詰まってしまい、悲しみをこらえてようやく読み終えるのだった。それほど当事者や関係者にとって、どんなに時間が経過しようがその悲劇は忘れることのない生々しい出来事であり続けるのだろう。編集の最中に横浜大空襲の関係者で詩人を探していると北村愛子さんや大石規子さんの名前が複数の関係者から挙がってきた。そして北村さんに連絡を取り、詩集を送ってもらい「横浜大空襲――一九四五年五月二九日――」と「亡骸（なきがら）を焼く」の二篇を収録させていただいた。

第一詩集の冒頭の詩「田舎」は、焼き出された母子が祖父と一緒に千葉の富津に疎開し、肺を病んだ父が帰還後に亡くなってしまったが、戦争が終わりようやく人間らしい暮らしを取り戻したころの一場面だったろう。妹が椿の花を手に握りしめてにっこり笑う瞬間こそが、北村さんにとって詩作の原点であった。その背景にはとてつもない二十世紀が生んだ無差別大量殺戮の戦略爆撃の悲劇が、母や子供たちに刻まれていたことを読み取れる。その意味で少女の北村さんは父や叔父や友人達を死なせた戦争の悲劇をいつも胸に秘め、助け合って生きてきた家族に感謝しながら、戦中・戦後の体験を書き記すために詩作を志したのではなかろうか。

第一詩集の中で最も印象に残っている詩篇は、「無数の泡」と「わたしのかげ」だ。その二篇を引用してみる。

無数の泡

水の中に無数の泡が浮いている
その泡の中の一つが私なのである
波にもまれもまれて
沈んでしまうかもしれない！
そんな恐れが
私の心の中にいつもあって
私はおびえている
けれど
私は沈みはしない！

私を支えてくれる
　たくさんの無数の泡
私はその中で
波の圧力に負けないように
一生懸命　歯をくいしばっている
（一九五五年　学習の友）

わたしのかげ

めらめらと
かげろうのよう
今も私は
この壁の上に
焼きつけられたまま
しゃく熱した太陽が
ギラギラと照る頃
私もめらめらと
もえあがる
体と体と
草と木と
いぶり、こげ
溶解した液が
地面にくろくしみついた
あの日
黒い太陽がこげ
のたうった
あの時
ただれた皮膚が
じくじくと
くずれた
わたしはかげろうのよう
めらめらと
かげろうのよう

真夏の太陽が
炎をあげるとき
みんなの胸に
あの日のことが
よみがえる
ひまわりの花が
ぐらぐらとゆれる時
わたしの心も
めらめらともえあがる

かげよ　かげ
永遠にしみついたかげ
わたしを
誰も消すことは出来ない
主を
なくしたわたしは
永遠に
あの日のことを
この壁の上に
この地面の上に
めらめらともえつづける
（一九五六年・樹木と果実）

北村さんの詩「無数の泡」には、たとえ泡を人間の在りように仮託した詩であっても、泡の尊厳と泡たちの助け合う連帯を透視しようとする。それは過酷な体験をして、不安や絶望を抱きながらも、人間不信にならずに逆に人間を信じようとする希望を夢みているのだ。「わたしを／誰も消すことは出来ない」という強さは、北村さん個人を超えて、多くの戦争で亡くなった人々たちを忘れてはならないという使命感を感じさせている。そうだからこそ北村さんには強い精神力が宿っていて、暗く沈んでいく心と闘いながらも、一筋の明るい光を「わたしのかげ」から透かし見ようとしているように私には感じられる。焼死した横浜の友人や知人たちの肉体の「溶解した液」が刻印された壁の上に、二十歳の北村さんは「永遠にしみついたかげ」を燃やし続けることを誓ったのだ。もっとリアルな詩が多い中でこの二篇は、北村さんのその後の詩作を予告しているような詩であり、「わたしのかげ」は、横浜大空襲体験者が書き残した優れた詩篇として記憶に留めたい作品だ。北村さんは母子家庭なので中学卒業後に就職したが、会社が倒産したりしながらも再就職し働きながら、夜間高校に通い、その合間を縫ってこのような詩を書き続けたことに驚かされる。北村さんは二十歳の若者としては押しつぶされそうな経験を逆手にとって、同時代の貴重な証言として詩篇を残したのだ。

第一詩集『祖国の砂漠の中に』には、「三鷹事件の裁判を思う」や「安保闘争の詩――樺美智子さんに捧ぐ―」など、その時代の大事件に取り組んだり、党派性のシンパシーを感じさせる詩などがあり、詩の完成度よりも詩のテーマ性に比重が向っている詩もある。しかし北村さんは、第一詩集から、労働者の現場から失敗を恐れずに政治的なことであっても、誠実に時代の苦悩と向き合い、書くべきことを残そうと心がけてきた詩人だった。詩には言葉遊び的な側面もあり、現実から遊離してもそれが言葉の芸術性を高めていくこともあり、それを否定することはできないが、北村さんにとっては書かざるを得ないテーマがあり、その切実さを荒々しく骨太に提示していくことが詩作の方法であったのだろう。中学を卒業

した十代半ば過ぎから学校の恩師が参加していた詩誌「ＪＡＰ」の中で大人に交じって詩作を始めていた。その成果がこの第一詩集に結実したのだろう。

2

第一詩集に続き第二詩集『工場の中で』の序文を赤木健介が書いているが、その序文の中に北村さんの特長を指摘している箇所がある。

《ここで注目されるのは、詩というと（短歌や俳句はもちろんであるが）ふつう作者が主体であって、「私」の感情をうたうことが多い。ところが、北村愛子のこの詩集では、一部、二部、三部を通じて、自分（私）というものが前面に出ている作品が、ないことはないが少ない。これは、作者が自己主張をするために詩を書くのではなくて、あるいは誕生した赤ん坊の身になり、あるいは朝鮮の子供になり、あるいは同じ職場で働く仲間の身になってうたっていることで、これは詩の方法としても注目すべきことである。そのことは、彼女が、孤独な自我を追求する現代文学とは違ったコースを意識して詩作していることである。》

この序文を書いた赤木健介は、北村さんの詩の師であると同時に詩誌「起点」の仲間であった。このような冷静な批評眼を持った人物がいたことは、北村さんにとって大きな励みになったに違いない。第一詩集と第二詩集の発行所は、起点社なのできっと赤木健介が刊行において尽力したのだろう。詩「ユミちゃん」を引用してみる。

ユミちゃん

だまってたっているあなたの
だまってみつめるあなたの
胸と肩が
悲しくふるえる

二人で一緒に勉強した
日々よ
学科では受かったのよ
と喜んだきのうの
あなたの瞳のかがやきは
どこへきえてしまったのか
四人に一人しか
受からなかった
臨時工の本工登用試験
きのうは
あんなに元気だったあなたが
きょうはこんなにしょげかえって
わたしにすらなにも話さない

だまってたっているあなたの
だまっている心が
わたしにはなぐさめようもなくて
そっとあなたの肩に手をのせる

北村さんの詩には自分のことよりも他者の悲しみや痛みに深く共感していくところがある。この「ユミちゃん」の底流に流れている友情は、詩のテーマとして書くのに実はとても難しい課題だ。友を励ますことも慰めることもできないが、その思いを込めて「肩に手をのせる」姿を書き残した詩は、友の努力を誰よりも知っていることを感じさせてくれ、とても清々しい思いがする。次に紹介する詩「労働者の手」も歴史的にも貴重な優れた詩だ。

労働者の手

いくら労働者の手だからと
いっても
つめがすりきれて
のびてこないのはかなしいな

ふかづめしたようにみじかい
わたしのつめ
のびようのびようと
いっしょうけんめいになっているのに
すこしのびはじめると
われてくる

有機溶剤をつかう職場
ピリピリとしみる液体に手をつける
その皮膚からいっぺんに
油性分を吸いとられるのだ
まっかになった手
皮膚炎をおこして
カサカサになった手
かゆくてかゆくてたまらず
あかみを出してしまう指先
レスタミンなんこうをつけても
チンク油をつけても
なにをつけてもちっともなおらず
ゴム手袋はやつでのように
ふくらみ役にたたない

しかし
わたしたちはきめた
ゴム手袋を支給してもらうことを
だめになったらすぐに支給して
もらうことを
とけない手袋がない今
それだけがわたしたちを
守るすべだから。

この第二詩集『工場の中で』が刊行されたのが一九六八年だが、この詩の中に出てくる手袋支給の闘争は一九六二年のことだった。北村さんは一九五六年に東芝砂町工場に臨時工として入社し、翌年の一九五七年に本工登用試験に合格し、その年には都立両国高校に入学した。北村さんは二十歳を超えても定時制高校に通い、また過酷な職場環境を少しでも改善するために闘っていた。日本が高度成長の時代に入った時の大企業の労働現場は、若い労働者たちにこのような情況下であったことを記した貴重な詩篇だ。北村さんの賃金は九年間勤続で一万六千八百円、手取り一万四千円であったという。そんな低賃金では暮らしが成り立たず、ついにはこの詩集を出す頃には中小企業に職場を替えることになっていく。このような劣悪な職場環境であっても、仲間たちと連帯して職場を変えていった北村さんには、この詩で描かれていった実践的な力が宝物として残ったに違いない。いまテレビのCMに頻繁に出てくる大手メーカー東芝の一九六〇年代の労働現場について、北村さんの詩のリアリティは、その問題点を永遠に告発し続けるだろう。

3

第三詩集『送電線』は一九八五年に十七年ぶりに出された。その間も詩は書かれていたが、結婚し子育ても忙しくて詩集までは手が回らなかったのだろう。詩集のタイトル詩「送電線」は、「山から山へ　鉄塔から鉄塔へ／送電線が伝っていく」ために、百メートルもの鉄塔を登っていく電工、土工たちの過酷な仕事場を語り、工事中に死んでいった下請けの労働者を悼み、その報われない男たちを褒めたたえた詩だ。そのような労働現場を書いた詩も多いが、次に引用する詩「酔っぱらい」などを読むと、家庭を持つことによって北村さんの人間愛が、詩に一層の魅力を加えていることが分かる。

酔っぱらい

まあるい太ったわたしが
十キロ近く重くなった美紀を
おんぶしてねんねこを着たので
さらにまあるくなった
保育園から渡された
ねまき袋を右手にさげ
よごれたよだれかけや
オムツなど入った手さげを左手にさげ
もう一つ　肩にさげたカバンをもって
うす暗く　寒くなった道路を
はあはあと歩いてくると

道路の真中で　よっぱらいが
両手をひろげて
あっちにいったり　こっちにいったり
よろよろとあるいていた

わたしがそのそばをこわごわ
とおりすぎようとすると

急にそのよっぱらいが
「あーあ　いっぺんによいがさめちゃった
おばさんは　すごいね
あーあ　いっぺんによいがさめちゃった」
急にしゃんとなったので
よくみると　まだ二十才そこそこの若者であった
そうよ　母親はつよいからね
がんばらなくっちゃねというと
その若い男は道ばたで両手をひろげて
こうよろよろしてちゃあ　嫁さんのきてもないやね　と
すこしよろよろしながら
それでもシャンとしようとして歩いていった
（起点　六十号　一九七四・七）

私はこの詩「酔っぱらい」を読むと母の強さはもちろんだが、むしろ母の強さに気づく酔っぱらいの若者の素直な心に拍手を送りたい。北村さんの詩には、若者をしゃきっとさせる何かがある。若者にお天道様のような存在である誰かに見られていると感じさせるものがあるのではないか。北村さんの生きることに一生懸命な存在感が、酔っぱらいの若者に残したものこそ真に大切なことなのだ。北村さんの子育ての姿こそが若者にとって最も雄弁なお説教となったのだ。このような味のある詩が書ける現役の詩人は思い浮かばない。私は子供が二十歳になる時には、この詩を読ませたくなる。詩を読まない若者であってもこの詩ならきっと人生の真実を直観できると思われる。

4

その後、前にも触れた一九九七年に『証言　――横浜大空襲――』で横浜大空襲の体験を書き記した。一九九九年には『ペンギンさん　頑張ろうね』を出した。「ペンギン」とは両膝を悪くして歩き方がペンギンに似ていると自らをなぞらえたのだ。その中に「会社」という詩がある。この詩にはグローバル化が進む現代社会が抱える根本的な問題点がさりげなく指摘されている。

会　社

四枚綴りや五枚綴りの
複写伝票に
ボールペンを握り締めて
書き続けて来た二十数年も

肘が重い痛みを感じるようになった
手のひらが痺れるようになった
頸腕症候群と診断された

パラフィン治療やマッサージを受け
痛み止めの注射をしてもらった
ホットパックや干渉波の治療も受けた

それでも痛みは続いた

それがある日
右手の肘が痛くないのがわかった
指で皮膚を押して肘を曲げてみる
すっかり治っているのだ

はてと考えてみると
最近コンピューターが導入されて
複写伝票を切らないでよくなったのだ

パソコンにデータを打ち込むのは
能率のあがる専門の社員だ
わたしは資料作りはするが
直接コンピューターの操作はやらない

ああよかった
わたしの肘は治ったのだと
喜んでいると
パソコンに一日中データを
打ち込んでいる社員が
最近　目がかすんで疲れる
右手の肘が痛んで困る

と腕をさすっているのだ

企業競争は激しい
生き残っていくためには
企業革新が必要だ
少しでも工夫して　無駄をなくせ！
コンピューターで管理せよ！
と命令が会社から出された

老眼鏡をかけて年配者までが
ワープロのキイを叩いている
しかし
年配者はなかなか機械についてはいけない
ワープロはいじれても
パソコンまでは使いこなせない

それでも必死に覚えようとする
パソコンができないと
社員でないような雰囲気が出て来た

パソコンが人間を使うのか
人間がパソコンを使うのか
とにかく今はパソコンが人間を使っている

最終連の三行は、十年前以上にもかかわらず現在社会の様々な労働現場においてもあてはまる予言的な言葉である。北村さんは工場の現場から事務所まで戦後の労働者の変遷を見てきたからこそこのような洞察力のある指摘が可能となったのだろう。自分の肘のことよりも、パソコンのキーを叩き続ける社員のことを気遣い、パソコンができなければ仕事にならない風潮に警告を発していた。パソコンのできるデジタル人間だけでなく、できないアナログ人間にも生きる道はないのかを思い描いていたのだと思われる。北村さんの詩にはいつの時代でも本当に人間を大事にする愛が根底に流れている。この詩集には北村さんが膝を悪くして歩くこともままならない日々を描いた詩も多く出てくる。そのことによって仕事も離れ、また家族を思いやり、新たな詩的な挑戦を予感させてくれるのだ。

二〇〇四年には第六詩集『なぜ？繰り返す』を刊行し父や祖父を想起し、戦争時代の実相を書き記した。また9・11以降のアメリカが引き起こしたアフガン・イラクの戦争下の人々を思いやる詩篇も書き残した。

その後、父の亡き後に苦楽を共にしてきた母との別れを描いた二冊の詩集――二〇〇六年『ありがとう』、二〇〇七年『お墓の意思表明』を刊行した。母の晩年をこれほどリアルに表現し、母の尊厳を残した詩集は、高齢化社会を生きている

多くの人々にも多くの示唆を与えてくれるだろう。

新詩集『今日という日』は、北村さんが今まで書き続けて来た詩群の重要なテーマをもう一度現在である『今日』から問い直したものだ。例えば一章「わすれないで」の冒頭の詩「はじめて背負った三貫目」には、終戦後に母が病気のために農家に食料を分けてもらいにいった体験を記している。少女に三貫目の芋を分けてくれて、「これ　ご褒美や／お母さんお大事にな」と告げて生みたての卵を五つ渡してくれた。北村さんはその時の農家のおばさんの温かい心を記している。また現在、両膝の痛みからの復活のためにリハビリのプール教室で出会った、障がいを抱えた人々の逞しく生きる「今日」の姿を描き続けている。これらの詩群はどんな困難な情況におちいっても決して挫けない人びとたちがいることを伝えてくれて、読むものに生きる勇気を与えてくれるだろう。最後にタイトル詩「今日という日」を引用しこの小論を終えたい。戦後社会の労働現場を振り返り、現代のワーキングプアを生み出した社会を考える上でも、北村さんの働く人間のための視点は、きっと現実の中に多くの真実や夢みる力を発見するエネルギーを与えてくれるだろう。そんなエネルギーに共感する人びとにこの詩集が広がっていく「今日という日」が来ることを願っている。

今日という日

障害者の水泳教室に入ったら
なんと
教えてくれる先生が
右膝から下が義足だった
逞しく泳ぐ姿に
勇気をもらった
おいらもやってやるぜ！
と心で叫んだ
Cグループの生徒の五人のうち
全盲の人が二人いた
一人は三十代後半の青年で
パラリンピックの平泳ぎの記録保持者だという
記録保持者が教室に入る必要ないんじゃない？
と言ったら
水泳は奥が深いのだと言う
もう一人は中年の女性で
緑内障で失明したという
まだまっすぐに泳げなくて苦労している

今日はクロールを泳ぎながら
くるりとひっくりかえって
背泳ぎになる練習をした

爪先を軽く
くるくるまわすキックを教わった
流線型に手と足をのばし
蹴伸びをすると
魚になったような気がした
力がぬけて楽になり
水の中で生き返る
両膝機能障害でも
いつかパラリンピックに
出られるかも知れない